啄木全集

第六卷

啄木全集

第六巻

筑摩書房

啄木全集　第六巻　日記(一)
一九六七年十二月二十五日　初版第一刷発行
一九七四年八月三十日　初版第八刷発行
著者　石川啄木
発行者　井上達三
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社　筑摩書房
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京四一二三
郵便番号一〇一―九一
本文用紙　三菱製紙
表紙クロス　東洋クロス
印刷　暁印刷
製本　矢島製本
(分類)0392(製品)70806(出版社)4064

目次

明治四十二年当用日記　三
NIKKI I. MEIDI 42 NEN 1909　五一
明治四十三年四月より　一七五
明治四十四年当用日記　一八三
千九百十二年日記　二三三

*

小説断片その他
その人々他　二五一
林中日記　二六五

解説　小田切秀雄　三八七
解題　岩城之徳　三九九

日記

(二)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

明治四十二年 当用日記

明治四十二年

一月一日　晴、曇、寒

今日から二十四歳。

前夜子の刻すぎて百八の鐘の鳴り出した頃から平野君と本郷の通りを散歩し、トある割烹店で食つて二時頃帰宿、それから室の中をかたづけて、寝たのは四時近くだつたから、目をさましたのは九時過。

空は朗らかに晴れわたつていたが、一杯の酒に雑煮、年始状を見て金田一君の室に行つてゐると、三階をゆすぶつて強い風が起つた。そしてチラ〳〵と三分間許り雪が落ちた。

満都の士女は晴衣を飾つて巷に春を追うた事であらう。予は一人室に籠つて北海の母に長い手紙を認めた。予は其手紙に、今年が予の一生にとつて最も大事な年――一生の生活の基礎を作るべき年であるとかいた。そして正月の小遣二円だけ封じた。

三時半頃になつて出かけた。空は曇つてゐて、風つよく、寒い。廻礼の人々が電車に溢れた。予は何がなしに浮世の春が自分一人をのけ者にしてるといふ様な感じにうたれた。千駄ヶ谷に与謝野氏を訪ふ。間島長島の二君がゐた。屠蘇、夕飯。与謝野氏はスバルの前途を悲観してゐた。主要なる話はスバルに関した事であつた。六時頃間島君と電車を同うして帰り、予は平出君を訪ねた。話はこゝでもスバルの事。予は編輯を各月担任者に全責任を負はせる事を説いた。(然し吉井君には任せられない。アノ人は仕事の人でないから。)と平出君が言つた。与謝野氏は予と同意見なのだ。

町々の店は大方戸を閉ぢて、元日の東京の夜は寂としたもの。八時頃帰宿。金田一君とカルタを一回やつた。(趣味)の小説をよみながら十二時就寝。

今日は何もせずに暮した。睡眠不足の為か、何となく閑散な、気のぬけた様な日であつた。(朝日)に森田君の(煤煙)が出初めた。

〔発信〕　母へ。スバルを堀合の姉妹と函館の家へ。

〔受信〕　賀状十六通。名刺、島村盛助君。

一月二日　快晴、寒

朝はこの冬無類の寒さ、水道の栓が氷つて水が出なかつた。

九時頃に起きた。平野君が来た。スバルの編輯について少し言つてみた。平野君は少し顔色を悪くした。

僕は各月三人が一人づつ全責任を以てやる様にしようと言ふのだ。（結局権利問題だ）と言つた。そして蒲原君が吉井君をつついた事を告げてしまつた。

平野は哀れな夢想家である。

二時頃上田氏を訪ふた。家々の前には盛装した少女が出てゐて、羽子を突いてゐる。東京は予をサッパリ関つてくれぬといふ様な感じがした。上田氏の書斎に通されて、二号の原稿をたのんだ。アンドレエエフの癩病患者をかいた小説の梗概をきいた。かへりに中村星湖の（半生）を買ふ。

上田氏も昴を公開的にすることを説いてゐた。

岩動孝久君が来た。吉井君が来た。三人で飯を食ふ。岩動君かへつてから吉井と本郷二丁目のトアル割烹店へ行つた。吉井は酔つた。そしてスバルの事其恋人の懐妊した事などを語つた。哀れなる男だといふ感じが、予をしてそのくだらぬ気焔をも駁せしめなかつた。そこを出て甘酒屋に入り、わかれたのは十時頃。

かへつて金田一君と一寸語つた。

何といふことなく予は心に頼むところが出来た。そして今迄平野を散々罵倒してゐたが今夜、それがあまりに小供染みてると感じた。ツマラヌ。一雑誌スバルの為に左程脳を費すべきではない。予は作家だ！

妹が外国人の家へ行つたハガキ、その返事をかきスバル一冊封じて何となく心安い。

金田一君は今日九段で山室軍平の辻説教をきいて泣いて来たといつた。（途中で詩をよんだんですね。）と予は言つた。

〔発信〕　妹、伊五沢文五郎、同源太郎、大貫晶川、富田砕花へ賀状出す。森川君へハガキ

妹、直太郎、正宗　へスバル。

〔受信〕　賀状、二十二通。名刺、郷古君。

一月三日　晴、温

ほか〳〵した日。金田一君と談つた。十二時頃岩動康治君が来た。金田一君と三人でカルタ。岩動君帰つて将棋、そうしてるところへ中村君。さうしてるところへ在原清次郎君。金田一君と中村君は別室へ。

色々と札幌小樽の話をきいた。それから二六社の土岐君が予の事を良くなく言つてるといふ事をきいた。予は、繁劇なる新聞社会に身を投じ、中傷詰詐の渦中に入ることの利害を考へた。ビールをのみ、蜜柑を喰ふ。日くれて共に夕めし。

在原帰つて予は吉井君にハガキを書いた。曰く（第二者

第三者にとりては何の価値なき、而し僕自身には重大なる或る事を発見した。僕は昨日までの僕が憐れでならぬ。モウこれから、僕は何人にも軽蔑されない、否、軽蔑する人には軽蔑さしておいて、僕は僕で其らの人を軽蔑してやる積りだ。ハハ……）

長い事、然り、長いこと何処かへ失つてゐた自信を、予は近頃やう〳〵取戻した。昴は予にとつて無用なものでなかつた。予はスバルのおかげで、今迄ノケ者にしておいた自分を、人々と直接に比較する機会をえた。

九時に平野が来て一時間許りゐて帰つた。この人には文学はわからぬ。人生もわからぬ。予はモウ此人の大きい呿呻におどかされぬであらう。

在原が来てるときであつた。せつ子から封書の賀状が来た。大晦日に室料を払つて五厘残つたと！　そして賀状のかげには予が金をおくらなかつた事に対するうらみが読まれる。予は気まづくなつた。あゝ、金は送らねばならなかつた。然し予は送りえたのであつたらうか？　今日は予の賀状がついて、いくらか我がいとしき妻も老いたる母も愁眉をひらいた事と思ふ。

中央公論の小説をよんだ。今日も客の為に時間を喰はれて何も書かぬ！

〔発信〕　吉井勇君
〔受信〕　賀状十九通　名刺岩動康治君

一月四日　雨、晴、温

雨がヒドク降つてゐた。午前は金田一君と語る。午飯がすむと雨がやんで雲がきれた。

伊東に帰つた太田君からハガキ。予の『赤痢』をモ少しシムボライズしたかつたと言つて来た。巳酉第二の封書を認めて送つた。その中に、予は予の現在の心持をかいた。スバルの事、及び平野吉井を蹴つたこと。〝荒布橋〟の事。太田が絵にする（小説脚本を）こと。書き了へた時、赤い日が西の山に沈みかけて、晴れあがつた空に紙鳶が一つ浮んでゐた。

京都の瀬川深君から久振の、そして興のない手紙。

太田へ手紙かいてる時、平野は夏目氏を訪はないかと言つて来たが、予は行かなかつた。

日がくれた。今夜は金田一君発起の加留多会。原君。菅野君、小笠原君、下斗米君、に宿の親類といふ大仁うた子、外二三人。十二時頃までやつた。大分元気がよかつた。

〔発信〕　太田正雄君へ封書。真々田薫君へ賀状
〔受信〕　賀状二十五通。瀬川深、太田正雄二君より消息。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一月五日　晴、温

今日はよい日であつた。

臼杵の平山良子から手紙、スバル半ケ年分前金と、〝佐保姫〟代金二円三十二銭為替でよこした。畠山亨君からも封書。

モ一通の封書は札幌なる橘智恵子さんからであつた。函館時代こひしく谷地頭なつかしくとかいてある。げになつかしいたよりではあつた。遠山女史樺太にゆき、日向女史出産、高橋すゑ子（嘗て中学生と噂あつてやめたといふ）が森の学校に赴任したことなどを初めて知つた。

金田一君の室で岩動君と将棋、二度やつて引分けたが、予の方がつよかつた。昼食中中村唯一君も来た。そこへ吉井君が来たので室にかへる。

一昨日やつたハガキは充分に功を奏してゐた。今日は頭から吉井を圧迫した。そしていつしかしめやかな結婚家庭などの話を吉井がし出した。夕方、編輯会議をひらくことについての平出平野にあてたハガキを持つて帰つて行つた。

湯に入つて、金田一君と二人、六時頃出かけて小石川原町に中村君の加留多会へ行つた。サッパリ気がはづまなかつたが、冷たい空気の正月ながら充ち〳〵てゐるかの家をみたのはアナガチ無用でなかつた。帰りは十二時、途中、敵国をあるく時のまねをすると言つてイタヅラしながら夜の路をあるいた。

今日渋民の駒井善吉秋浜三郎の二人から賀状が来た。うれしかつた。

斎藤大硯君より函館日々新聞十五週年記念号を送つて来た。

〔発信〕　山西薄明、三重野牧雨へ賀状。善吉三郎へヱハガキ、平野平出へハガキ。

〔受信〕　賀状十三通。

一月六日　曇、温

風邪の気味で一日鼻がつまつた。朝は金田一君より先におきた。

平野から（ハガキにて御質問ゆゑハガキにて御返答仕候）云々のハガキ、会議は開かなくてもよいではないかと、少し怒つた口調で言つて来た。予はうれしくなつた。わざと一日ハガキも出さず電話もかけぬ。

午前に斬髪し、昨日の為替をうけとり、スバルを三部買つて来て平山、橘、高野の三人へ。平山へ手紙、高野へハガキ。

正午から智恵子さんへ手紙をかき出した。夕方並木君来た。一緒に飯。笑はせクラをしてさわいでると伊東圭一郎君。

相不変痔がよくないさうな。この人は気取らないといふことを気取つてる人だ。しかしなつかしかつた。岩動君宅のカルタ会には金田一君に先に行つて貰つて、一時間許り話した。それから一緒に出て、電車の中で高々と盛岡弁で語りながら江戸川終点で下車。わかれて予は一人岩動君宅に行つた。立派な家だ。

カルタはつまらなかつた。金子といふ日詰の人にあつた。十一時辞して関口の天プラヤの二階で金田一君と共に江戸川の水音をきゝ、かへつて来たのは十二時半。それから智恵子さんへの手紙を書了へた。

今日、日景君から賀状と共に釧路新聞の新年号を送つて来た。ハガキ一枚で仲直りなんか面白い！

山城正忠が名刺をおいて行つた。

九日の歌会にの招待状森先生お家から。

小日向台の下、水道町に救世軍の女三人（一人はハタ）男一人ゐた。へいまわが心は雪より白く……

ト見ると大館光！

〔発信〕　平山良子橘智恵子へ封書。高野桃村へハガキ。

〔受信〕　森林太郎、平野万里、よりハガキ。賀状十四通。

一月七日　曇、温

おそく起きて朝飯をくはぬ。

風邪が昨夜電車での寒さで強くなつたやうだ。頭脳が一所に集中しない。

久振で菅原芳子に手紙かいた。吉井には昨日の平野のハガキを写して出す。

新年の諸雑誌をあさつた。正宗真山二氏のはドノ号のもうまい。描写の技倆に於ては、青果氏は当代一、そして正宗氏のに至つては、更に何者か人生のかくれたる消息を伝へてゐる。〝早文〟に出た（地獄）も全く感服した。

夜九時頃であつたらう。昨夜も名刺をおいて行つた山城正忠君が来た。酒を七合のんで来たと言つて、大分酔つてゐた。独歩集を几の上からはなしたことがないと言ふ。嘗て予によこしておいた（路傍の人）はその閲歴だといふ。予はそれについて、赤裸々に所見を言つて、返した。

哀れなる感情家！

いろ〳〵なことをさも情にたへぬといつた様に語つて、十二時に帰つて行つた。

この日伊東なる太田君から絵をかいたハガキ。（――こ

ないだもね、当地の茶屋でもつて荒布橋をやつたが、少し手傷を負つた。だが何しろ故郷はやはらかいところだな。おまけに温泉までがある。併し海だ。あんなに大きく恐ろしいもののくせに、その漣のひびきのやさしいつたらないからな。――八日にかへる。）

日高の大島君からも賀状。

〔摘要〕風邪。

〔発信〕菅原芳子へ封書、吉井君へハガキ。

〔受信〕賀状九通。太田正雄君ハガキ。

一月八日　曇、寒

おそく起きた。咽が痛い。しきりに咳が出る。頭が半分いたい。

（塵の悲哀）をかかうとして半日考へたが、どうも思慮が集中しない。（水声）を書かうとして結構漸く出来た午後四時頃、平出から昴の会議をやるとの電話。

すぐ行つた。平野吉井平出、アトから川上君、与謝野氏、栗山君、都合七人で九時ごろまでやつた。意見はすべて予の言ふことが通つた。平野は大分予が物をいふ度に不快な顔をしてゐた。

予は勝つた。編輯担任者はその号に全権をもつことにした。そして平野がやると言つてゐた短歌の添刪までもとりかへした。平野の言ふことは皆やぶれた。

かへり、三丁目で電車をおりてから、平野と方々の雑誌屋の店に立つた。そして予はその時も勝つてゐた。二人は、否平野の方から、いろ〳〵つまらぬ雑誌の売行の話などをした。

そばをくつてかへる。少し熱が出た様だ。留守中に太田正雄君が来たとかで名刺があつた。今日帰京してすぐ来てくれたのであらう。

吉井は昨日から尾久村の別荘の方へ行つてるげな。

浅草公園第五区九九、分吉野やつや子なる女から毎日社内宛で年始状が来た。予の小説の名と住所をしらしてくれと――分吉野やは植木の妹すみ子のゐる所ときいた。これは屹度彼女が予の住所を知らむとする策略だらう。

立花直太郎君は（赤痢）のお由婆の性格がよく描かれたと言つて来た。お由はまだ生きてると見える。

玉子湯をのんで寝た。

〔摘要〕風邪、昴の相談会

〔発信〕金星会規則二通。返稿一。

〔受信〕賀状四通。立花直太郎君ハガキ。つや子よりハガキ。

一月九日　曇、夜雪、寒

十一時ごろに起きた。頭がいたく、のどが痛い。風邪がすこしも直らぬ。

太田君から電話。

昨日持つて来たスバルの投書のうたを少し直した。

一時頃に太田君が赤い顔をして元気よく入つて来た。旅中に沢山材料をえたと言つてよろこんでゐた。予は、予の編輯する号は君と北原には蹂躙にまかせると言つた。三時まで話した。二号には（南蛮寺門前）といふ脚本を貰ふ約束。

森先生の会だ。四時少しすぎに出かけた。門まで行つて与謝野氏と一緒、吉井君が一人来てゐた。やがて伊藤君、千樫君、初めての斎藤茂吉君、それから平野君、上田敏氏、おくれて太田君、――今日パンの会もあつたのだ。

題は十一月からの兼題五、披露が済んで予が十九点、伊藤君が十八点、寛、高湛、勇の三人は十四点、その他――

十時散会、雪が六七分薄く積つて、しきりに降つてゐた。予は伊藤君の傘に入つて色々小説の話をしながら森川町まで来た。傘につもる雪がサラ〳〵と音がする。軒々の火が曇つてみえる。予は何となく北の方の国が恋しくなつた。そして何となく東京を歩いてるのでないような気がした。映世神社のヒバ垣から雪をとつて喰つた。

お常の好意、玉子酒をのんで寝た。風邪をなほす為である。

金田一君は今夜原君の宅の加留多会へ行つた。女中には（大臣の家へよばれた）と言つて行つたさうな。予は少し愍然な気がした。大臣の家！

予の新しい気持、――少しもヒケをとらぬ此頃の気持は、よほど周囲の関係を変化させた。予はこの友――恩ある友を憐むの心の日に〳〵強くなることを悲む。

〔摘要〕　森先生宅の観潮楼歌会。

〔発信〕　つや子へ。

〔受信〕　（ハガキ）山城正忠君、小笠原迷宮君、迷宮君より歌稿。

一月十日　曇、温

十時頃に起きた。前夜の玉子酒が利いたと見えて、頭がズツト軽くなつた。夜中には少し汗も出たらしい。鼻の中はまだ変だが、気持は大分なほつた。

妹からハガキ、専心伝道の為につくす考だから安心してくれと言つて来た。（昨日先生のお許しを得て栄町のわが

家を訪ひましたところが、老いたまへる母上がひとり淋しげに台所に働いてをられました。――）

石井柏亭君から松に雪のハガキ。渋民で生徒であつた一戸完七郎から賀状。

今日は誰も来なかつた。半日想をかまへてかの六日の日のことを書かうとした。十枚も最初の一枚を書き損じて、題を（束縛）とあらためた。そして予は十一時すぐるまでにやつと一枚半かいた。

束縛！　情誼の束縛！　予は今迄なぜ真に書くことが出来なかつたか?!

かくて予は決心した。この束縛を破らねばならぬ！　現在の予にとつて最も情誼のあつい人は三人ある。宮崎君、与謝野夫妻、そうして金田一君。――どれをどれとも言ひがたいが、同じ宿にゐるだけに金田一君のことは最も書きにくい。予は決心した。予は先づ情誼の束縛を捨てて紙に向はねばならぬ。予は其第一着手として、予の一生の小説の序として、最も破りがたきものを破らねばならぬ。かくて予は（束縛）に金田一と予との関係を、最も冷やかに、最も鋭利に書かうとした。

そして、予は、今夜初めて真の作家の苦痛――真実を告白することの苦痛を知つた。その苦痛は意外に、然り意外につよかつた。終日客のあつた金田一君は十一時頃に一寸来た。予はその書かむと思ふことを語つた。予は彼の顔に言ひがたき不快と不安を見た。

あゝ、之をなし能はずんば、予は遂に作家たることが出来ぬ！　とさうまで思つた。予は胸をしぼらるる程の苦痛を感じた。真面目といふものは実に苦しいものである。惨ましいものである。予は歯ぎしりした。頭をむしりたく思つた。あゝ情誼の束縛！　遂に予は惨酷な決心と深い悲痛を抱いて、暁の三時半までにやつと二枚半許りかいた。

予は勝たねばならぬ。

〔摘要〕（束縛）――作家としての最初の一夜――忘るべからざる一夜。

〔欄外記載〕この日起きると、雪が五寸許り――初雪だ。見る限りの一白、窓から斜の西片町の木立から、風なきに雪がおちる。予は渋民の寺の正月を痛切に思出した。

〔発信〕北原君へ原稿依頼のハガキ

〔受信〕妹、石井柏亭君（ハガキ）賀状三通、（海沼、佐田、一戸完七郎）

一月十一日　晴、温

目をさますと、雪消の軒の雫――木々の枝にはないが、家々の屋根にはまだ一面の雪の景色――。十一時近くまで寝てゐた。午までに（束縛）をまた四五枚かき直した。そして昨夜よりは少し気が落付いてゐて、急にこの想を、モツト大きいもの――予が上京以来のことをすべてかくものにしようと決心して、心が初めて明るくなつた。そして昼飯――実は朝飯の膳に向つた。少しづつ書いてスバルに載せよう。

出かけようと思つてると、並木君が来た。三十分許で、一しよに出て、四丁目から予一人電車。

乗合の人々を見まはして、予は心をどるをおぼえた。あゝ、この一人〳〵が立派な小説を一つ宛持つてるのだ。

平出のところで十円包んで、風寒き夕方、麻布霞町に和田英作氏を訪ねた。スバルの表紙の御礼を出し、裏絵のことをたのんだ。画家は愛相のよい人であつた。帰つてくると日がくれた。風寒い夕べであつた。

間もなく太田君が、来て、九時まで語つた。太田君はしきりに雷同論を称へた。その雷同は、言つてみれば戦場の握手――予は賛成した。そして予は、この友に親しむ気が一日〳〵に深くなるを感じた。筆を持つた思想家――年をとつたか若いかわからぬ男だ、気持のよい男だ。

十時頃から三十分金田一君とはなした。君は、予の小説についての話、少くとも昨夜の話のつづきをさけた。予は今夜、昨夜初めて作家の心持になつたと太田に語つた。

今日なつかしい堀田秀子から長い手紙が来た。太田と語りながらよんだ。坪仁子からハガキ。

人見君から新天地二月号へ歌をたのむといふハガキと、同誌新年号を送つて来た。

〔摘要〕　初めて和田英作氏に逢ふ。

〔発信〕　一戸完七郎へハガキ。

〔受信〕　賀状六通（堀田、八重樫、坪、高崎、塚原、高安）米国後藤治一郎、在原君、人見君からハガキ

一月十二日　曇、寒

十二時すぎておきた。

上田氏を訪うたが不在。夜になつて又訪うた。九時半までの清談――氏は自然主義と社会主義との関係、――から、日本に起つて来た、或は起りつゝあるデモクラット的思想についておもしろい観察を下してゐた。そして、今の小説――自然派の小説は、今のまゝで進めば勢ひ社会、道徳等

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com